

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号	12604
研究種目	基盤研究(C)
研究期間	2009~2011
課題番号	21520394
研究課題名(和文)	「数詞句単独投射仮説」に基づく日・中・英語名詞句構造の理論的・実証的研究
研究課題名(英文)	A Theoretical and Empirical Investigation of Nominal Structures in Japanese, Chinese, and English on the basis of 'The Independently Projected Classifier Phrase Hypothesis'
研究代表者	
鈴木 猛 (SUZUKI TAKERU)	
東京学芸大学・教育学部・教授	
研究者番号	00187741

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語の類別詞は、よく言われるように名詞句を補部として取るのではなく、数詞を補部にとって生起する(名詞句なしで類別詞句単独で1人前)と主張し、そこから得られるさまざまな帰結を明らかにした。さらに最終年度では、類別詞単独投射の仮説をさらに発展させる一方、名詞句から動詞句へ焦点を移し、数量に対応するアスペクトに着目、関連特性である結果句の生起の言語間に見られる違いについても研究を進展させた。

研究成果の概要(英文)：This study proposes that in Japanese the classifier obligatorily takes a numeral complement, not an NP complement, to form a constituent (i.e., [_{CIP} (Spec) [[NUMERAL] CLASSIFIER]]), severing itself and the numeral from the rest of DP (i.e., [_{DP} [_{NumP} [_{NP} N] Num] D]). Numerical specification is then implemented by a CIP's adjunction to one of the nominal extended projections, namely NP, NumP, and DP. The present hypothesis, we argue, explains a number of facts.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	400,000	120,000	520,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,400,000	420,000	1,820,000

研究分野：生成文法理論

科研費の分科・細目：言語学・言語学 1

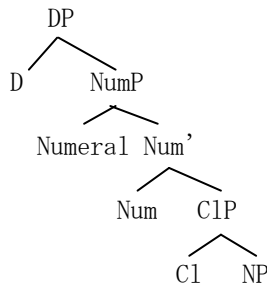
キーワード：生成文法、名詞句、数詞、助数詞、類別詞、付加

1. 研究開始当初の背景

生成文法においては支配的な考え方が、すべての言語が一定のUG特性に規定されていることを例えばWatanabe 2006は前提としている(「均一性」)。この方策を採る場合、ある言語で観察される特性にもとづいて仮定された構造を、その特性が存在する証拠の

ない別の言語にも議論もなく適用することになりがちである。その結果、当該構造の記述的妥当性を過大評価してしまう可能性があり、常に望ましい方策だとは言えない(Fukui and Takano 2000にも同様の姿勢が見られる)。なお、日本語の数詞の特性を捉えるにあたっては、Kawashima 1998、Watanabe

の主張する日本語・中国語・英語に（おおよそ）共通する「均一性」に基づいた構造として次のような構造を仮定する。



通言語的に類別詞が名詞句を補部として取り句構造を投射する。

一方、類別詞「人、冊」の生起と形態・統語的な数の標識（例えば複数形）の欠如を相関させ、その説明のため、数標識のある英語タイプの言語とは別のタイプの構造を設定する考え方もある（Chierchia 1998 参照）。もちろん、UG の観点からは、「均一性」が望ましいと言えるが、別タイプ構造を強力に支持するのは、ある言語で UG 特性が実現するかどうかは当該言語のその他の特性によって異なりうるとする主張である。この主張のもとでは、言語間の差異をより現実に即した形で捉えることが可能になる。Cheng and Sybesma (2005) の提案は、この後者の立場であると考えられる。彼らは中国語の（不定）名詞句が

$[_{NumP} \text{ Num } [_{ClP} \text{ Cl } [\text{ NP }]]]$
(Cl=Classifier)

という構造を持つとしており、それが正しいとすると、中国語の名詞句構造は英語タイプの DP 投射構造

$[_{DP} \text{ D } [_{NumP} \text{ Num } [\text{ NP }]]]$

とは異なることになる。すなわち、同一の意味形式が言語ごとに異なる範疇・構造によって表出される可能性を示唆している。

参考文献

Cheng, L. L.-S. and R. Sybesma. 2005. Classifiers in four varieties of Chinese, in G. Cinque and R. Kayne eds., *The Oxford handbook of comparative syntax*, 259-292, Oxford University Press. // Chierchia, G. 1998. Reference to kinds across languages, *NLS* 6, 339-405. // Fukui, N. and Y. Takano. 2000. Nominal structure: An extension of the Symmetry Principle, in P. Svenonius ed. *The derivation of VO and OV*, 219-254. Amsterdam: John Benjamins. // Kawashima, R.

1998. The structure of extended nominal phrases: The scrambling of numerals, approximate numerals, and quantifiers in Japanese, *JEAL* 7, 1-26. // Watanabe, A. 2006. Functional projections of nominals in Japanese: Syntax of classifiers, *NLLT* 24, 241-306.

2. 研究の目的

前述の「同一の意味形式が言語ごとに異なる範疇・構造によって表出される可能性」は理論的に非常に重要であり、本研究はこれを支持し、具体的には日本語・中国語の数詞は単独投射、英語の数詞は補部を取る複合投射という見通しから始まった。日本語・中国語・英語の数詞構文を比較し、日本語・中国語には共通点があり英語とは異なることを示した上で、その相違がどのように生じるのかを明らかにしようとした。

本研究は、単独投射の支持を第一義とし、研究期間内に数詞の分布のパターンごとの特性を詳細に吟味し、単独投射構造が適切であることを示すとともに、その特性の派生機構を明らかにしたい。さらに、通言語的な視野から日本語と中国語の類似点と相違点を見極め、英語との相違点を構造的に導く可能性を考察し、最終的には単独数詞句がどういふ条件で可能になるかを明らかにしたい。

3. 研究の方法

単独投射仮説を検証するため、下記4つの見通しの検証を3年間で行った。

見通し1 日本語において、単独投射である数詞の名詞句「修飾」は付加構造で具現化される。

見通し2 それぞれの付加構造が意味特性等を適切に記述できる。

見通し3 UG 特性の実現は言語（および方言）によって異なりうる（制限的多様性）。

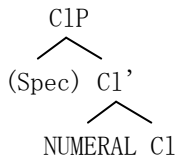
見通し4 日本語と中国語型は数詞を実現する統語範疇・構造が異なる。

実際の作業手順としては、まず大きく見通し1・2と見通し3・4とに分け、前者を平成21年度、後者を平成22・23年度に検証した。研究成果発表のため、国際学会CLS/WCCFL/NELSへ適宜応募した。

4. 研究成果

研究を進める過程において、前述の数詞単独仮説は次のような内容になった：日本語の数詞部分は、類別詞句 (Classifier Phrase) が数詞を補部とし、名詞句なしで最大投射として生起する (類別詞句単独で1人前; 下の構造参照)。そしてこれから得られるさまざまな帰結を明らかにした。以下 CLS で発表した論文の主張を要約

する。
日本語の類別詞句の構造は以下の通りである。



類別詞句を名詞表現から切り離すことで

3人の家族

のように、必ずしも共起する名詞表現（上例では「家族」）を数えない事実に対応でき、さらに類別詞が数詞を補部とすることで両者の密接な関係、例えば

*3の家族

のように類別詞なくして数詞が生起しない事実をも扱うことができる。

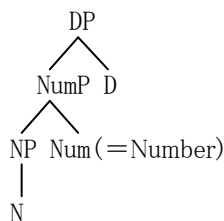
下の例からわかるように英語や中国語では正反対になっており、日本語で異なった統語構造を設定する第一の根拠となる。

Three families \neq three members of family

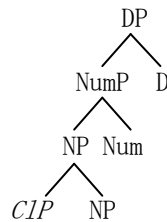
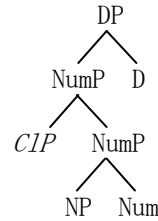
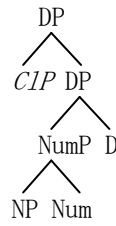
すると構造的には類別詞句に指定辞が許されると予測されるが、事実この位置が活用されることが次のような例からわかる。

[_{CIP} [グラスで/に]] [_{C1'} 3杯のワイン]]

ではどのように類別詞句を名詞表現と結びつけるかという、もう一つデフォルトで使える統語関係、すなわち、付加を使う。類別詞句を除いた名詞表現は、他で仮定されている次のような構造を想定する。



すると、類別詞句が付加できる最大投射が3つ (DP, NumP, NP) あり、次の3つの構造が可能になる。



興味深いことにこれら3つの位置に付加することによって3つの多義性があることを説明できるのである。まず次の例は「その」という DP 要素の外側にあるので DP 付加である。

[_{DP} 3本の [_{DP} そのペン]]

また、次の例は多義で、a, b の解釈が可能である。

3人の学生が（合計）6冊の本を読んだ。

- a. 'A group of three students read a total of six books.'
- b. 'Three students read a total of six books each.'

a の読みにおいては、2つの数詞のスコープが互いに独立しており、いわゆる数えるものとして機能していない。つまり、数詞が students を形容詞と同様に「特徴付け」をしていると考えられる。「3人という特徴を持つ学生」ということになり必然的に複数の学生＝グループのことになる。この読みは、数詞を含んだ類別詞句全体を形容詞と同様に NP に付加させることから得られる。一方、b の読みでは、スコープの相互関係があり数詞が数量として機能しており、類別詞句を NumP に付加することで得られる。

最終年度では類別詞句単独投射の仮説をさらに発展させ国内論文集に発表する一方、名詞句から動詞句へ焦点を移し、数量に対応するアスペクトに着目、関連特性である結果句の生起

の言語間に見られる違いについて研究を進展させ、WCCFL で発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計2件)

- ① 鈴木 猛、Strong Resultatives as a PathP Construction: PathPP Structure and Parametrized Path Head Movement, West Coast Conference on Formal Linguistics, 2011 4 24, アリゾナ大学 (アメリカ)
- ② 廣瀬富男・鈴木 猛、Two Systems of Counting: Two Sorts of Complement, Chicago Linguistic Society 2010 4 8, シカゴ大学 (アメリカ)

[図書] (計1件)

- ① 『ことばとところの探求』2012 大橋浩他編 開拓社 (Some Notes on the Classifier Phrase Hypothesis, 119-132, 廣瀬富男)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 猛 (SUZUKI TAKERU)
東京学芸大学・教育学部・教授
研究者番号：00187741

(2) 研究分担者

廣瀬 富男 (HIROSE TOMIO)
神奈川大学・外国語学部・准教授
研究者番号：80360329

(3) 連携研究者

(無し)